

# *The Old Curiosity Shop* における 〈聖〉と〈俗〉

吉 田 一 穂

## 序

1837年4月にチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-70）は、妻のキャサリン（Catherine）と赤ん坊を連れて、ダウティ・ストリート（Doughty Street）48番地に引っ越した。しかし、新しい環境での快適な暮らしを始めてまもなく、キャサリンの妹メアリー・ホガース（Mary Hogarth）の突然の死によって、ディケンズ夫妻は強い打撃を受ける。5月のある晩、3人そろって劇場から帰ってきたとき、メアリーは突然くずおれた。ディケンズ夫妻は、夜通し看病したが、数時間後、メアリーは義理の兄に抱かれて息を引き取った。わずか17歳だった。

ディケンズは、打ちのめされてしまった。作家として生涯でただ一度だけ、彼は月ごとの連載を書くことができなかった。メアリーの死は、ディケンズの作品に深い影響を及ぼした。作中の子供たちが病気になって死んでいく場面の悲痛な描写に、その影響を見てとることができる。エリザベス・ジェイムズ（Elizabeth James）は、リトル・ネル（Little Nell）のような登場人物の理想化されたイメージにもメアリーが投影されていること

---

キーワード：聖，俗，巡礼，旅，神

を指摘している（James 42-43）。

ネルの描写は全ての読者に歓迎されたわけではない。エドワード・フィッツジェラルド（Edward Fitzgerald, 1809-83）は、「ボズ（Boz）のにせもののペイソス」と批判し、ダニエル・オコンネル（Daniel O’Connell, 1775-1847）は、ネルが死ぬ運命にあることを知って、列車の窓から怒りのあまり、本を投げ出してしまった。さらに、オルダス・ハックスリー（Aldous Huxley, 1894-1963）は、“Vulgarity in Literature”（1930）の中でネルの描写が感傷的にすぎることを指摘している（Huxley 332）。

しかし、*The Old Curiosity Shop*（1840-41）のネルが、若くして天に召されたメアリーだけでなく、複合的な要素により生み出された人物であると考えられる点を見落としてはならない。賭博への誘惑を断ち切ることが難しい老人の犠牲者となりかねなかった少女ネルは、産業社会で労働力として用いられ、大人の犠牲者とならざるをえなかった子供の労働者とイメージの上で重なり合う。産業社会は、イギリス社会を発展させる一方で多くの少年労働者を生み出した。ネルが第44章と第45章で通るかかるバーミンガムも例外ではなかった。寄宿・通学学校の校長であるモンフラザーズ（Monflathers）先生がネルに対して言う国の工業を助け、労働を促すような発言は、労働者階級の子供の人権を無視したような発言であると同時に、当時の大人が子供を労働力として考えていて、子供が犠牲になっていたことを示している。このような大人の犠牲者としての子供をネルは表している。そのためネルの描写が感傷的になったとしても、犠牲者としてのネルを印象づけるという点から考えると、むしろネルの描写は成功を収めていると言える。

ジョセフ・ゴールド（Joseph Gold）は、「無垢は、生き残ることはできないが、不朽である」と述べている（Gold 95）。ネルは、大人の犠牲者だけではなくさらにこのような無垢をも象徴していて、不朽となるには、ディ

ケンズは〈聖なるもの〉を描き出すと同時に〈俗なるもの〉を描き出す必要があった。〈俗なるもの〉とは、宗教や教会に関係のないものや卑俗なものを意味する。*The Old Curiosity Shop* には、〈聖〉と〈俗〉のコントラストが巧みに用いられていて、ネルの死へと至る旅が効果的に描き出されている。〈聖〉と〈俗〉は、作品の中で対照的に描かれているだけでなく、互いに関係し合っている。ミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade, 1907-86) は、*Images et symbols* (1952) でシャーマン、ある種の神話の英雄、キリストに見られる共通の要素として「魂の救済を目指す」冥府降下というモチーフを挙げている (エリアーデ 211-12)。ネルは冥府には降下しないが、キリストの如く現世に生き、魂の救済と密接に関わる人物である。このことから彼女は、作品の中で最も〈聖なるもの〉を表していると言える。

本論文では、*The Old Curiosity Shop* においてディケンズがいかに〈聖〉と〈俗〉のコントラストを用いているか、またその結果どのような効果をあげているかについて考えてみたい。

## 1. 〈俗なるもの〉とネルの共存

ローズマリー・コールマン (Rosemary Coleman) は、ネルについて、「無垢の象徴であるディケンズの小さな子供は、野蛮でグロテスクなものに取り囲まれて、最初から危険にさらされている」と述べている (Coleman 37)。作品の最初ハンフリー (Humphrey) 親方は、道に迷ったネルと会い、彼女の家にたどり着く。ディケンズは、ハンフリー親方の目に映るネルの祖父と骨董屋を次のように描写している。

The place through which he made his way at leisure, was one of those receptacles for old and various things which seem to crouch in odd

corners of this town, and to hide their musty treasures from the public eye in jealousy and distrust. There were suits of mail standing like ghosts in armour, here and there; fantastic carvings brought from monkish cloisters; rusty weapons of various kinds; distorted figures in china, and wood, and iron, and ivory; tapestry, and strange furniture that might have been designed in dreams. The haggard aspect of the little old man was wonderfully suited to the place; he might have groped among old churches, and tombs, and deserted houses, and gathered all the spoils with his own hands. There was nothing in the whole collection but was in keeping with himself; nothing that looked older or more worn than he. (4-5)<sup>1)</sup>

この老人がゆっくりと進んできた場所は、骨董品をおさめてある場所で、そうした品物は、この町の片隅にひそみ、警戒と不信の目を光らせて、そのほこりだらけの宝を大衆の目からかくしているような感じだった。そこに、甲冑をつけた亡霊のように、鎖かたびら一式があり、修道僧のいた寺院から運びだされた奇妙な彫り物、さまざまな錆のついた武器、陶器、木、鉄、象牙でつくったゆがんだ姿、つづれ錦、夢の中でつくりだされたかと思われる奇妙な調度がならんでいた。この小柄な老人の気味のわるいほどやつれたようすは、驚くほどこの場にふさわしいものだった。古い教会、墓、打ち捨てられた家をこの男が手さぐりでさがし、こうした掠奪品すべてを彼自身の手で集めたとはいえるものだった。蒐集した品物は、いずれもそろって、彼に似合っているもので、どんな物も、彼以上に古いもの、彼以上にすり減っているものにはみえなかった。

引用における老人と骨董屋の様子は、骨董品が老人の手で集められたものであり、老人の様子と非常に似つかわしいものとなっていること、また、価値はともかく、大衆の目から隠されたようになっていることを示している。骨董屋の様子は、あたかも老人の唯物論的価値観を示しているかのようである。夕食の準備をするネルを見、彼女が家事を全てやっていると悟ったハンフリー親方は、老人に「子供たちがまだ幼児の時期もぬけてないのに、世の荒波の中にはいっていく姿を見ると、いつも悲しいことに思っているんです。信頼感と純真さは、神さまから授かった子供たちの最高の性格ですが、世に出ると、それが阻害され、世のよろこびをまだ味えぬうちに、世の悲しみを知ることになるんですからね」(6)と言う。

ハンフリー親方の言葉は、ネルの未来を暗示しているかのような言葉である。ネルの前に現れるクウィルプ (Quilp) は、善と無垢の象徴とも言える彼女を害する存在と言っていい。ハリー・ストーン (Harry Stone) は、「いたるところで、クウィルプの略奪するようなどん欲が明示される。周囲の人間を大喜びで熱狂的に食い物にし、抵抗することさえできない怪物の小びとは、日々の生活の細々としたところで人食いの性質をさらけ出している」と述べている (Stone 218)。このようなクウィルプの職業は多方面にわたり、仕事は数多くあるが、特定の職をもった者とは言えない。彼は、テムズ川の川べりのきたならしい通りや路地の地区から家賃を集め、商船の水夫や下級船員に金を前貸しし、東インド会社のさまざまな航海士の投機的な事業に参加し、税関事務所の鼻先で、密輸入の葉巻きをふかし、光沢のある黒の麦わら帽子とまるまるとしたダブルの上衣を着けた人たちと、毎日盛んに、王立取引所で契約を結んでいる。

このような様子からクウィルプがイギリス国内にとどまらず、貪欲に国外にも手を伸ばし、自分の利益を求めているように見える。背はとても低く頭と髪は異常なほど大きく、落ち着きがなく、陰険で、狡猾な黒い目を

し、牙のような歯をしているクウィルプは、自宅での朝食のとき、ゆで卵を殻ごとすっかり食べ、大きな車えびを頭も尻尾もくつついたままガツガツと食べ、同時に驚くほどの貪欲ぶりでタバコとオランダからしを噛み、煮えこぼれる茶をまばたきもせず飲み、フォークとスプーンを噛みつけて、それを曲げてしまう<sup>2)</sup>。このようなクウィルプは、ネルに対して、「第一のクウィルプ夫人が死んだとき、第二のクウィルプ夫人になるこったよ、かわいいネル」(45)と言う。クウィルプは性に関しても貪欲なのである<sup>3)</sup>。

見落としてはならないことは、クウィルプがネルを守るべき立場にある老人の危険性をあらわにすることだ。クウィルプは老人に大金を貸していたが、妻を使いネルから老人の秘密を聞き出す。そして、老人の金が賭博場に消えたことを言う。「つまらない、浅はかな賭博師風情に、このおれがめくらにさせられるなんて！」(74)と言うクウィルプに対して、老人は次のように言う。

‘I am no gambler,’ cried the old man fiercely. ‘I call Heaven to witness that I never played for gain of mine, or love of play; that at every piece I staked, I whispered to myself that orphan’s name and called on Heaven to bless the venture;—which it never did. Whom did it prosper? Who were those with whom I played? Men who lived by plunder, profligacy, and riot; squandering their gold in doing ill, and propagating vice and evil. My winnings would have been from them, my winnings would have been bestowed to the last farthing on a young sinless child whose life they would have sweetened and made happy. What would they have contracted? The means of corruption, wretchedness, and misery. Who would not have hoped in such a case? Tell me that! Who would not have hoped as I did?’ (74)

「わしは賭博師ではないぞ！すごい剣幕で老人は叫んだ。「神もご照覧、自分の利益、賭博の楽しみで、それをしたんでは絶対ないぞ。金を賭けるたびごとに、わしは心の中であのみなし児の名をささやき、その賭けを祝福してくださるように、神さまに祈ってたんだ—祝福は一度も授からなかったがね。神さまの祝福は、だれに授かったと思う？わしの賭けの相手はだれだったんだ？掠奪、放蕩、道楽で暮し、悪事をするのに金を湯水のように使い、悪徳と悪事をひろめてるやつらなのだ。わしが金をまきあげようとしたのは、こうしたやつらからだ。そしてその金は、最後のビター文まで、あのけがれの無い子供に授けられるはずだったんだ。その金で、あの子の生涯を安楽にし、幸福にすることができたはずなんだからな。その金がどんなことをひきおこすところだったのだろうか？腐敗、墮落、みじめさの道具になっただけさ。こうしたことで、望みをもたん者がいるだろうか？その返事をしてくれ！わしのように、望みをもたん者がいだろうか？」

老人の言葉に対し、「このきちがいじみたことを、いつはじめたんだ？」(74)と尋ねるクウィルプは、〈俗なるもの〉で、ネルを脅かす存在であり、一方でネルを守るべき老人もまた〈俗なるもの〉、すなわち賭博でネルの生活を脅かす存在なのである。注目に値することは、賭博をネルの生活を豊かにするためだとし、自分を正当化しようとしていることである。しかし、家がクウィルプに差し押さえられてしまうことにより、老人の行為が見当違いの行為であることは明白である。「ここにグズグズしているより、はだしで世界をさまよい歩きましょう」(94)と言うネルに対して、老人は、「そうしよう、野や森を通り、川や土堤を歩いて行って、神さまにおゆだねすることにしよう」(94)と言う。家から逃亡することより、ネルと老人は一時的に〈聖なるもの〉へと向かう。

マイケル・スレイター (Michael Slater) は、「ネルが救いのない老人とイングランドを当てなく旅し、グロテスクなまでに恐ろしく、無法者で性的略奪者と言ってもいいクウィルプから逃れる物語は、ディケンズの小説の中で最もロマン主義的でおとぎ話的である」と述べている (Slater 29)。ディケンズは、ロマン主義的でおとぎ話的である物語を読者に示すと同時に、家にあったジョン・バニアン (John Bunyan, 1628-88) の *The Pilgrim's Progress* (1678/84) の一部を思い出し、「もしあの本に書いてある場所がそのとおりだとすれば、ここはそこよりもっと美しくずっといい場所なわけね。その点をべつにしたら、わたしたちふたりがクリスチャン (Christian) になり、わたしたちのもってきた心配と苦しみをみんな草の上におろし、それをもう二度ととりあげることがないような感じがすることよ」(116-17) と祖父に言う。少し前の箇所でネルと老人の旅を「二人の巡礼」(114) と表現しているので、*The Old Curiosity Shop* において、ディケンズが二人の旅をクリスチャンの旅と重ね合わせていることは明らかである。

〈俗なるもの〉から逃げ出し〈聖なるもの〉へ向かった二人であったが、コドリン (Codlin) とショート (Short) に出会い、順調に思われた旅は順調にいかなくなる。コドリンとショートは *Punch and Judy* の興行を行っている。*Punch and Judy* は、19世紀というよりも18世紀に人気の頂点に達していた。この頃にパンチの物語と性格は、イギリス生活の一部となった。19世紀になって1828年に批評家ジョン・ペイン・コーリアー (John Payne Collier, 1789-1883) は、*Punch and Judy* の脚本を *The Tragical Comedy or Comical Tragedy of Punch and Judy* というタイトルで出版した。この脚本は、ジョヴァンニ・ピッチェニ (Giovanni Piccine) によって演じられたものに基づいていて、有名な諷刺画家ジョージ・クルックシャンク (George Cruikshank, 1792-1878) の挿し絵が付けられていた。ポール・シュ



リッケ (Paul Schlicke) は、暴力的ではあるが陽気なパンチ (Punch) からディケンズがクウィルプを作り出したと考えている (Schlicke 126)。

ゴールドは、「ディケンズの読者の誰一人としてコドリンとショートの仕事について読むとき、*Punch and Judy* を連想させる一連の細かい描写に気づかぬものはなかった」と述べるだけでなく、「ディケンズの読者は、パンチが悪の名人であり、妻を殴る無礼者のサディストであり、全ての人に戦いをいどみ、誰も信じないグロテスクな人でなしであることを知っていた」と指摘している (Gold 95-96)。ディケンズは、鼻と顎が鉤型になっている主人公や、パンチの鼻にかぶりつくトウビー (Toby) の様子などにより、克明に *Punch and Judy* を描写している。ネルは *Punch and Judy* のお針子をするようになるが、クウィルプの元へ送り戻される可能性を察知し、老人とともにコドリンとショートの元を去る。



*Punch and Judy* by Robert Cruikshank<sup>4)</sup>

*Punch and Judy* のお針子の仕事を辞めた後、ネルはジャーリー (Jarley) 夫人のろう人形の仕事をやる。アイリーン・クリアー (Eileen Cleere) は、ろう人形の仕事を「経済的にも報いがあり、より上品な仕事」であると指摘している (Cleere 52)。ジャーリー夫人は、*Punch and Judy* とろう人形との違いをネルに「低級な打つ殴るの騒ぎ、あのひどいパンチのように冗談をとばしたりキーキーいったりするもんじゃなく、冷淡と上品さのいつも変らぬもののよ」(203) と説明する。ジャーリー夫人の言葉は、彼女が *Punch and Judy* を〈俗なるもの〉と考えていることを示している。

見落としてはならないことは、ディケンズが読んでいた *Tom Jones* (1749) に *Punch and Judy* を〈俗なるもの〉とする箇所があることだ<sup>5)</sup>。第12巻第5章でジョウンズ (Jones) が立ち寄る宿屋で人形芝居が行われる。人形芝居は、上品で厳粛なものであることから、興業主は観衆から良い評価を得る。彼は、「パンチとその女房のジョウン (Joan) とか<sup>6)</sup>、ああいうつまらんしろものを追放して、やっと人形芝居も健全な娯楽になったわけです」(525) と言うが<sup>7)</sup>、ジョウンズは、「でもやはりぼくは昔なじみのパンチ君にお目にかかりたかったなあ」(525) と言う。それに対し、人形使いの男は、「そういう低級なものを登場させて、整然と上品な舞台をぶち壊すのはごめんですわい」(525) と言う。このことから、ディケンズが *Tom Jones* における *Punch and Judy* を〈俗なるもの〉とする箇所を読み、影響された可能性が考えられる。

話を元に戻したい。ジャーリー夫人のろう人形についての案内をする仕事を引き受けることにした日、ネルは、夜クウィルプを目撃してしまう。幸いにして彼女は、クウィルプに目撃されなかったため、ロンドンに連れ戻されずにすむが、「自分が群がる多くのクウィルプにすっかりとり囲まれ、空気そのもののさえ、そうした姿で一杯になっているように」(208) 感じる。このことから、ネルの旅は、ロンドンから逃れても〈俗なるもの〉

から逃れられないのであるが、この状態は、老人と二人だけになっても解消されることはない。それは、老人が再び賭博に走ってしまうからである。ある休みの夕方、あらしを避けるため立ち寄った居酒屋「勇敢なる兵士」で、老人は、「幸福になる方法は、札とさいころにあるんだ」(223)と言って、ネルの金でアイザック・リスト (Isaac List) たちとのトランプ勝負に挑む。賭け金に貪欲になったり、目を貪欲で異常に輝かせて、ネルから盗んだ金を勘定する老人は、ネルにとっては、危険な存在であるだけでなく、〈俗なるもの〉へ彼女を引きずりこむ邪悪な力でもある。

マライア・マクアリーヴィ (Maria McAleavy) は、「ネルの特徴は、彼女がかなり自己抑制をすることである。祖父を守る奮闘の中、彼女は、意識的に深い悲しみを和らげる」と述べている (MacAleavy 129)。ネルは、祖父に対する保護者の役割を果たすため、自己抑制せざるを得なくなっているが、子供であることに変わりなく、ディケンズは、〈俗なるもの〉と共存せざるを得ない彼女を描き出すと同時に〈聖なるもの〉へと向かう彼女をも描き出している。

## 2. 〈聖なるもの〉へと向かうネル

*Punch and Judy* のお針子の仕事から解放され、ジャーリー夫人のろう人形について案内する仕事をするようになったにもかかわらず、ネルはちらしを持って行った先のモンフラザーズ (Monflathers) 先生にろう人形の仕事を「とても下劣で非女性的なこと」(235)と言われてしまう。また、モンフラザーズ先生は、次のようにも言う。

‘Don’t you feel how naughty it is of you,’ resumed Miss Monflathers, ‘to be a wax-work child, when you might have the proud consciousness of assisting, to the extent of your infant powers, the manufactures of your

country; of improving your mind by the constant contemplation of the stream-engine; and of earning a comfortable and independent subsistence of from two-and-nine pence to three shillings per week? Don't you know that the harder you are at work, the happier you are? (235)

「ろう人形のとこの子供になってるなんて」モンフラザーズ先生はつづけた、「子供なりの力に応じて、この国の工業を助け、蒸気機関車をたえず考えることで心を鍛錬し、週に2シリング9ペンスから3シリングまでかせぐことで快適な人にたよらぬ生活をするほこりやかな意識をもとうとすればもてるのに、それがどんなに下劣なことか、感じないの？仕事をせせとやればやるほど、それだけ自分が幸福になるのを、あんたは知らないの？」

エドガー・ジョンソン (Edgar Johnson) が、「若い女性のための女学院の経営者モンフラザーズ夫人は、下層階級のものとは工場や農場で絶え間なく働かされるために作られたと感じている」と述べているように (Johnson 328)、モンフラザーズ先生には明らかに貧乏人に対する差別意識が見られる。上品な子供たちの場合は、本や健康な遊びがあてがわれ、貧乏人の子供たちの場合は、仕事だけがあてがわれるというモンフラザーズ先生の差別意識は、社会構造によるところも大きい。産業の重労働を支えているのは、労働者階級であるからだ。

そのような労働者階級の状態をディケンズは、一人の労働者によって示している。再び旅に出たネルと老人は、ある男に溶鉱炉が日夜燃えている場所に連れて行かれる。男は「火はわたしにとって本のようなもんさ」(331)と言う。また自身の母親について「お母さんはいなかったの？」(331)と尋ねるネルに「そう死んじゃってね、この辺じゃ女がせせと働

くんだ」(331)と言う。さらに彼は、「おやじは火の前で死んだ」(331)と言う。労働者は、「このわたしをみて、わたしがどんな子供だったか見当がつくだろうが、きみとわたしのちがいはあるにせよ、わたしは子供だったし、今晚街路できみの姿をみたとき、おやじが死んだときの自分のことをその姿で思い出し、きみを火のところへつれてきたいという気持ちになったのだ」(332)とネルを連れてきた理由を説明する。このような労働者の言葉は、モンフラザーズ先生が考える産業を支える労働者の子供の運命をネルもたどりかねないことを暗示している。

注目に値することは、産業の犠牲者となる子供を表す労働者と老人の賭博の犠牲者となるネルが平行して描かれていることである。ネルを労働者のいる場所に導いたのは、老人の賭博であった。彼は、アイザック・リストたちとの勝負に再び挑む。彼の賭博癖は、僥倖をねらう激情からきている。ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) は、*Daniel Deronda* (1876) で娘のマイラー (Mirah) の財布の金で賭博をする父親ラピドス (Lapidoth) の姿を描いている。エリオットは、ラピドスの状態を「賭博への欲望は、肉体の飢餓以上に絶対的な支配力を持つ」(745)と説明している<sup>8)</sup>。このような状態が老人にも見られ、マイラーがラピドスの犠牲者となる如く、ネルは老人の犠牲者となる。ネルは、眠っている人たちから金を盗んでいる祖父のような白髪の男たちの夢を見たことを老人に言い、「わたしにじゃなくて一天にお祈りをするのよ、そうしたことから救ってくださいとね！」(318)、「逃げる以外に救われる方法はないのよ。さあ、起きて！」(318)と言って老人を救い出す。老人は、ネルが「その好むところに自分を連れ出してくれる天使の使者であるかのように」(318)、彼女の前で膝をかがめ、彼女のあとについてゆく準備をする。また、ネルに連れて行かれるとき、老人は、「卓越した存在を前にしたかのように」(320)感じる。

老人を賭博から救うネルは、*David Copperfield* (1850) でデイヴィッド (David) を良き方向に導く守護天使アグニス (Agnes) を思い起こさせる存在であるが、〈聖なるもの〉へ導くネルを描くに際し、ディケンズは *The Pilgrim's Progress* を強く意識していると考えられる。*The Pilgrim's Progress* において、クリスチャン (Christian) は、エヴァンジェリスト (Evangelist) に小さなくぐり門へ行く道を教えられるが、背中に背負っている荷物から早く解放されるため、ワールドリ・ワイズマン (Worldly Wiseman) の教えてくれたもっと近道で、困難を伴わない、もっと良い道を行こうとする。エヴァンジェリストは、ワールドリ・ワイズマンが現世的な気質を持っているがゆえに、自分の道を妨げようとしていることをクリスチャンに伝える。また彼は、「狭き門より入るよう努めよ」(19) (Luke 13 24)<sup>9)</sup>、「生命に導く門は狭く、これを見出すものは少なし」(19) (Matthew 7: 13-14) と言う。クリスチャンの背中の荷物は、救いの場所に行き、木の上に血を流しながら懸っている人を見たとき、落ちる。この人は、イエス＝キリストであり、バニアンは、キリストの贖いによってのみ人が救われることを示している。

*The Old Curiosity Shop* において賭博への誘惑から救われた老人は、労働者から町を出たらどのコースをとるべきか教わるが、あの人の教えてくれた道はわびしい道だ」(334)、「他に道はないもんかね？何か他の道をとったらどうだろう？」(334) とネルに提案する。それに対しネルは、「わたしたちが安らかに暮し、人を苦しめたりする気がぜんぜん起きない場所があるのよ。そうした楽しいみとおしのある道を進み、その道が、たとえわたしたちが心配して考えられるのより百倍もひどい道でも、その道をさけたりはしないことよ」(334) と言う。ネルの言葉は、あたかも楽になれる道を望んだクリスチャンに忠告するエヴァンジェリストの言葉のようであり、ディケンズはネルに老人を〈聖なるもの〉へ導く役割を与えている。

しかし、ネルと老人は、高い煙突が疫病の煙をはき出し、失業した労働者の群れが、道路で示威行進をし、粗末な棺をいっぱい積んだ荷車がゴロゴロと音を立て、孤児が泣き叫び、狂乱の女が悲鳴をあげてその後を追う工業都市を通り過ぎる。このような場所を通り過ぎるネルを示すことにより、ディケンズは産業社会で犠牲になった子供を印象づけている。シュリツケは、第45章でネルが「飢餓の40年代」の苦しみを見ていることを指摘しているが (Schlicke 89)、ネルは、現世的な苦しみから解放された姿を示している。「子供は、自分の体と天の間になんのさえぎるものもなく、横になり、わが身を心配しての恐怖はもう超越していたので、そうした恐怖は感じたりはせずに、あわれな老人のために祈りをささげた」(336) という描写や「自分には何の不足もないと考えていると感じ、ただ老人のために誰か友を与えてくださるようと神に祈っていた」(336) という描写は、ネルの他者のため自身を顧みることのなくなった救い主のような姿を表している。しかし、気を失って学校教師の足もとに倒れることにより、ネルが乏しさと病で弱っている哀れな少女であることを読者は再認識する。

気絶したネルを腕に抱きあげた学校教師は、ネルと老人がかつて会った学校教師、すなわち、マートン (Marton) 先生であった。このマートン先生は、かつて自分の生徒であるハリー (Harry) を死によって失った人物である。ハリーの祖母は、ハリーが死にかけているとき、「これが勉強ばかりしていた因果なのさ」(191)、「お前さんこわさに本にかじりついたりしなかったら、いまごろ、元気で陽気になったことだろうよ」(191) と言う。しかし、ディケンズは、死にかけているハリーの様子を、「この友人はとても齢のいかぬ少年、ほんとうに小さな子供だった。またまき毛の髪は顔あたりにさがり、目はとてもキラキラと輝いていたが、その輝きは地上のものではなく、天国のものだった」(192) と描写している。さらにネルが見たハリーについての夢は、「棺に入れられもせず、おおわれても

いなく、天使にまじって幸福にほほえんでいるもの」(194)であった。

アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) は、「リトル・ネルの物語は、死を主題としたものである。——死の意味というのではなく、死の光景、近親者における死の影響力、特に子供の死の影響力、ということである」と指摘しているが (Wilson 140)、ディケンズは、天に召されて幸福な子供像をも提示している。教会書記と先生に任命されたマートン先生は、村でネルと老人に古い家を提供する。コールマンは、「ネルの新しい家は、古く、幽霊のような教会、崩壊しかかっている廃墟、墓地の近くの荒廃した建物である。最後にどのように異常なものであったとしても、家庭生活の機会を与えられ、彼女は、墓地に庭を作り、来たるべき美しい死にふさわしい環境である霊廟に家を持つ」と述べている (Coleman 40)。家を提供された日の夜、ネルは、ハリーの夢、屋根が開き、かつて古い聖書の絵で見たことがある、はるか空遠くに姿をあらわし、眠っている自分を見下ろしている一列に並んだ明るい顔々の夢を見る。ディケンズは、「それは楽しい幸福な夢だった」(389)と説明している。また墓地で、マートン先生は、「天国の軍勢に加えられる天使はみな、この地上でその天使の子を愛していた人たちの中で、その神聖な仕事をしているのだ」(406)と言っている。このような表現は、ネルがまもなく〈聖なる死〉を迎えることを暗示している。

ディケンズは、ネルが貧しさから死へ向かう一方で、対照的なクウィルプを描いている。第50章においてクウィルプが会計事務所で食べる巻きパン、バター、砂糖、ヤーマスの燻製にしんなどは、彼の食べる食べ物の豊かさを示している。付け加えると、彼は、家においてもジャマイカのラム酒を飲んでいて、比べものにならないほどの豊かさを享受している。彼は会計事務所で、「これで、ロビンソン・クルーソーのように、カントリー・ハウスができたぞ」(372)と言う。1719年に *The Life and Strange Surpris-*



*ing Adventures of Robinson Crusoe* として刊行された小説のヒーローであるロビンソン・クルーソーは、船乗りになり、無人島に漂着し、独立して生活を築いていく。クウィルプは、このロビンソン・クルーソーと貴族や大地主が田舎に所有している大邸宅であるカントリー・ハウスと関連づけることにより、海外に進出して豊かになった自分を空想していると考えられる。ジャマイカはかつてはスペイン領であったが、1670年に正式にイギリス領になり、イギリスはジャマイカを拠点にしてカリブ海への影響力を強めた。このことから、クウィルプが飲むジャマイカのラム酒は、イギリスが西インド諸島から得た豊かさを表している<sup>10)</sup>。彼が吸うタバコもまた、西インド諸島のキューバ (Republica de Cuba) 共和国やドミニカ共和国 (República Dominicana) などを連想させることから<sup>11)</sup>、イギリスが西インド諸島から得た豊かさを表していると思われる。

一方で、かつて老人に「乞食になって、幸福になりましょう」(71)と言ったネルは、賭博という〈俗なるもの〉から祖父を救い出し、〈聖なるもの〉へと向かわせ、質的に異なる豊かさを示している。その豊かさとは、神に祝福されるという豊かさである。*The Old Curiosity Shop* において、ネルの老人に対する影響力はとても大きなものである。そのことは、「わたしをお前のそばにおいておくれ。ほんとうに、わたしはとても誠実になり、嘘を言ったりはしないよ、ネル」(407)という老人の言葉や、「ふとしたどんなときにも、自分の身を構ったり、自分だけの安逸を思うといった利己的な考慮のために、自分の愛情のやさしい対象であるネルのことを忘れてしまうといった態度は、老人には絶対にみられなくなった」(410)といった描写からもうかがえる。

ミルチャ・エリアーデは、〈聖なるもの〉の救済について述べている。シャーマンは、悪霊に憑かれた病者の魂を求め、それを奪い返すために冥府に降りていく。ギリシア神話でオルペウス (Orphée) もまた世を去っ

た妻、エウリュディケー（Eurydikē）を取り戻そうと冥府に降りる。類似したポリネシア、北アメリカ、アジアの神話でも、一人の英雄が亡き妻の魂を取り戻そうと冥府へ降りると伝えられている。イエスもまたアダムを救い、犯した罪ゆえに墮落した人間を救うため冥府に降りる。ここにエリアーデは、〈魂の救済を目指す冥府降下〉という共通のモチーフを読み取っている。それが病める者の魂（シャーマニズムの場合）、妻の魂（神話の場合）、全人類の魂（キリスト）であるかは重要ではない。降下は、共通の救済という目的を持っている（エリアーデ 211-12）。

ネルの場合は、冥府に降りることはないが、キリストの如く現世に生き、老人の魂を救う。また彼女の生き方も人の魂を救う要素となっている。最後にキット（Kit）が自分の子供たちに「全ての良い人たちがゆくように、ネル嬢ちゃんも天国に行った、お前たちも良い人間になれば、いつかはそこへ行き、自分がまだ小さな少年だったところと同じように、ネル嬢ちゃんに会って話をすることができるようになるんだよ」（554）と教えることにより、ディケンズは、全ての人間が〈俗なるもの〉へ向かう可能性を秘めている一方、生き方を改め〈聖なるもの〉へと向かう可能性もあることをも示している。

## 結 び

以上、*The Old Curiosity Shop* において、ディケンズがいかに〈聖〉と〈俗〉のコントラストを用いているかについて考えてきた。ネルは、最初グロテスクで貪欲なクウィルプに脅かされる。クウィルプは、東インド会社のさまざまな航海士の投機的な事業に参加し、密輸をしているように見える。また、彼はネルに妻が死んだら第2の妻になることを求める。これらのことからクウィルプは、宗教や教会、すなわち、〈聖なるもの〉と正反対の〈俗なるもの〉を表す存在であると言える。

このようなクウィルプからネルは解放されるが、彼女は、クウィルプから解放されても〈俗なるもの〉から解放されない。なぜならば、共に旅する祖父が賭博に熱中し、彼女を危機的状況へ追いやるからである。ディケンズは、*The Pilgrim's Progress* のクリスチャンのごとく楽な道をとろうとする老人がエヴァンジェリストのようなネルに導かれる様を描き出している。ネルが休息を得るのは、マートン先生に古い家を提供されてからである。マートン先生は、ジャクソン (Jackson) が指摘しているように、「思ひやりがあり、無視無欲の男性」であり、「個人的な利益のためネルを使うことに興味が無いがゆえに信頼するに足る人物」である (Jackson 50)。マートン先生による導きにより、村と教会にたどり着き、ネルは小塔の天辺から死から生へ通り抜けたような天に近づいた感じの光景を見たり、礼拝堂で聖書を読んだりする。ネルの死後、「神さまの正義は、この地上で終わるものではありません」(536) というマートン先生の言葉により、ディケンズはこの世での財産、名声、快楽には無縁のネルの存在を肯定している。

トマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) は、*Sartor Resartus* (1833-34) の中で、トイフェルスドレック (Teufelsdröckh) への問いかけ、すなわち、「汝は天上にもまた人間の中にも神があるということを如何程あらましにでも、知っている百姓の息子になりたいか？それとも自家用の馬車に32も紋章があることしか知らぬ公爵の息子になりたいか？」(77) と、「精神的思い上がりを用心せよ」(77) という忠告を示している<sup>12)</sup>。ディケンズは、*The Old Curiosity Shop* において〈聖〉と〈俗〉のコントラストを用いることにより、神に肯定されるネルの生と死を印象づけている。人間はこの世では、食欲、金銭欲、名誉欲などの欲を満たすことを追い求めがちであるが、ディケンズは神に信頼を置くことが重要であることをネルの生と死を通して示している、と言っていいたいだろう。

注

- 1) Charles Dickens, *The Old Curiosity Shop* (New York: Oxford UP, 1991), pp. 4-5. この作品からの引用文は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、北川悌子訳『骨董屋』（岩波書店）を参考にした。
- 2) リサ・ハートセル・ジャクソン（Lisa Hartsell Jackson）は、「ダニエル・クウィルプの野獣のような様はネルの天使のような愛らしさと対照的であり、彼の奇形の小さな体は、不自然な心の表れである」と述べている（Jackson 47）。
- 3) ブライアン・マレー（Brian Murray）は、「*The Old Curiosity Shop* においてクウィルプは、究極の利己主義を表す人物である。彼は、粗暴で貪欲なあばれんぼうである」と指摘している（Murray 101）。
- 4) ロバート・クルックシャンク（Robert Cruikshank, 1789-1856）は、ジョージ・クルックシャンクの兄。
- 5) *David Copperfield* の第4章で、ディケンズは、デイヴィッド（David）が読む二階の部屋の彼の父の蔵書の中に *Tom Jones* が含まれていることを示している。

From that blessed little room, *Roderick Random*, *Peregrine Pickle*, *Humphrey Clinker*, *Tom Jones*, *the Vicar of the Wakefield*, *Don Quixote*, *Gil Blas*, and *Robinson Crusoe*, came out, a glorious host, to keep me company. [Charles Dickens, *David Copperfield* New York: Oxford UP, 1989), p. 55.]

- 6) イングランドで通常演じられているものは、パンチの妻はジョウンでなく、ジュディー（Judy）である。
- 7) Henry Fielding, *Tom Jones* (Harmondsworth: Penguin Books, 1966), p. 525. この作品からの引用文は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、朱牟田夏雄訳『トム・ジョウンズ』を参考にした。
- 8) George Eliot, *Daniel Deronda* (London: J. M. Dent, 1999), p. 745. この作品からの引用は、この版による。日本語訳の部分は、淀川郁子訳『ダニエル・デロンダ』（松籟社）を参考にした。

ラビドスは、窓の日除けに「ピラミッド」と屋号が記してある居酒屋にちよっ

と立ち寄った折に、最初はマイラーの30シリングを倍にし、次は3倍にしたが、結局は全部擦ってしまう。

9) John Bunyan, *The Pilgrim's Progress* (Oxford: Oxford UP, 1991), p. 19. この作品からの引用文は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。

10) ジャマイカは、1790年から1800年に至るまでイギリスの輸入の5分の1、砂糖の40%近くを提供していた。ジャマイカは、また1780年代後半から1790年代前半にかけてカリブ海の10の領地からイギリスに送られた砂糖のうち、少なくとも40%、多くて53%を提供していた。同じ時期、ジャマイカは、イギリスに輸入されるカリブ海のラム酒のうち、72%から84%を生産していた。ラム酒を輸送するため、ジャマイカの入植者たちは、西インド諸島の貿易に関わるイギリス船の41%から53%を必要とした (McCahill 9-10)。

*Great Expectations* (1861) でハーバート (Herbert) が、「ぼくは、また西インドと、砂糖やたばこやラム酒の貿易をやるだろう」(GE 173) と言っていることから、イギリスでは、西インドから多くのラム酒が輸入されることが期待されていたことが窺える。

当初、糖蜜から作られた焼けるような酒は、「キルデビル (悪魔殺し)」と呼ばれていたが、後に「ランブリオン」(rumbullion) と称された。(これはイギリスの俗語で、飲み過ぎた後の「どんちゃんさわぎ」を意味する。) この言葉がやがて短く縮まり、「ラム」(rum) に変化した (カーリン 86)。

砂糖産業については、カリブ海のセント・クロイ (St. Croix) 島でも輸出産業であったようである。アレクサンダー・ハミルトン (Alexander Hamilton, 1755-1804) は、1768年、ニューヨーク商人のクルーガー (Cruger) とビークマン (Beekman) 所有の店で働き始めた。ハミルトンは、雇主のため、入ってきた荷物を調べた。彼らは、プランターのための必需品 (りんご酒、れんが、材木、トウモロコシ、その他の商品) を輸入し、サトウキビから作られる製品、すなわち、砂糖、ラム酒、糖液を輸出した (Ann Mah 15)。

ヴェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart) は、ユダヤ人が砂糖産業に密接に関わっていたことを指摘している。ユダヤ人は、1492年のアメリカ発見と同時に、カリブ海のヴァージン諸島 (Virgin Islands) において、砂糖産業を創設し、大がかりな農園経営を始めた。彼らは数多くの砂糖工場を設立

し、まもなく3千人の黒人労働者を働かせた。1550年頃、この島の砂糖産業は大いに発展した。ユダヤ人は、マデイラ（Madeira）諸島、あるいは、セント・トーマス島で始まった砂糖産業を後にアメリカ植民地の中で最大のブラジルに移した。1624年、数多くのアメリカへ移住したユダヤ人が集合し、ブラジルに植民地を建設した。ここには、オランダから600人のすぐれたユダヤ人が流入した。17世紀前半でも、全ての大砂糖農園は、ユダヤ人の手中におさめられていた（ゾンバルト 80）。

西インド諸島のいくつかの重要な部分と、隣接の大陸の沿岸地帯は、ユダヤ人の移住により、17世紀以来、初めて真に繁栄するようになった。例えば、ほとんどのユダヤ人のみが居住したバルバドス（Barbados）がある。この土地は1627年、イギリス領になり、1641年、サトウキビが栽培され、1648年、砂糖輸出が始まった。だが製糖業は維持できなかった。それというのも、この砂糖は品質が悪く、イギリスへの運送費すらまかなえなかったからである。ブラジルを追放されたオランダから移住したユダヤ人が、初めて、バルバドスで能率のよい製法を実施した。同地の住民に乾燥した保存のきく砂糖の製法を教えたわけで、まもなく砂糖輸出も速いテンポで進められた。1661年、早くも、チャールズ2世（Charles II, 1630-85）は、バルバドスから1万ポンドの収入を得ている13人の地主を男爵に任命した。そして1667年頃、同島はすでに年間700隻の船に、それぞれ180トンの粗糖を載せて輸出することができた。

1664年、トマス・モディフォード（Thomas Modyford, 1620-79）が製糖業を、バルバドスからジャマイカに移したところ、同島は急速に富裕になった。1700年には、砂糖はジャマイカの主要産品となり、同地の繁栄の基を築いた（ゾンバルト 81-81）。

サトウキビとイギリスとの関係で付け加えておきたいことは、1733年の糖蜜条令である。糖蜜条令は、ラム酒製造の独占権をあくまで維持したいサトウキビ栽培植民地の訴えに基づいて、イギリス本国が北アメリカ植民地に対してフランス領アンティル（Antilles）諸島からの糖蜜に関し、輸入禁止に等しい高額関税をかけるものであった（フェロー 333）。糖蜜条令は、1763年に失効し、1764年に新しい砂糖法が議会で可決され、糖蜜にかかる税率は半分になった。1765年に印紙法（Stamp Act）（アメリカ植民地にイギリスが

課した印紙税を定めた法)が制定されると、強い抗議が始まり、1766年に砂糖法は撤廃された。

砂糖と三角貿易は、切り離して考えることができない。サトウキビは、6フィート(約180センチ)を超える高さまで成長する植物である。それは、熱帯の気候で良く成長するが、クリストファー・コロンブス(Christopher Columbus, 1451頃-1506)がそれを持ちこむまで西インド諸島に存在しなかった。ヨーロッパ人たちは、西インド諸島を奴隷を働かせてサトウキビを育てるのに良い場所であると考えた。船は、ヨーロッパの港を離れて、銃、衣類、銅などの品物をアフリカまで運んで行った。ひとたびアフリカに着くと、品物を奴隷として後に売られる人間と交換した。多くの奴隷は、旅の途中で死んでしまったが、生き残ったものは、アメリカへ送られ、プランテーションで働かされたり、綿を摘み取ったりさせられた。あるいは、サトウキビを収穫するためカリブ海に送られた。しばしば木綿と砂糖は、糖蜜やラム酒になり、ヨーロッパに運ばれた。船が3つの地域を行き来したので、これは三角貿易と呼ばれた(Pollack & Belviso 10-11)。

イングランドでは、奴隷貿易は1807年に違法と布告された。そして、奴隷制は、ブリテンのカリブ海諸島で1833年から違法になった。カリブ海諸島で奴隷制の完全廃止を唯一達成したのは、フランス領サン＝ドマング(Saint-Domingue)であった。同地では、1791年から1804年まで続いた一連の暴力的紛争の中で、奴隷自身によって解放が達成された(ウートラム 119-20)。

ところで、フランスは、ヨーロッパで最大の奴隷貿易の国の一つであった。推定で140万人の捕まえられた人々がアフリカからフランス領ギアナ(Guiana)、グアドループ(Guadeloupe)、ハイチ(Haiti)、ルイジアナ(Louisiana)に輸送された。そこで彼らは、売られて奴隷にされた。貿易商たちは、砂糖、コーヒー、チョコレート、香辛料、ラムをナント(Nantes)に持ち帰った。ナントは、フランスの貿易の大きな割合を占める都市であった。ナントに停泊している船は、45万人から55万人の奴隷を輸送した。全体では、推定で1200万人の奴隷がヨーロッパの貿易商たちによってアフリカからアメリカに運ばれた。生きて大西洋を横断したのは、そのうちの1070万人であった(Rubin 3)。

1834年から1846年まで西インド諸島のフランス平均年間生産は、18万4千

60トンから13万1千177トンまで落ちこんだ。奴隷制廃止は、解放された奴隷をプランテーションの経済から独立させた。ジャマイカやブリティッシュ・ギアナ（British Guiana）のような植民地において、多くは、新しく確立される村のためプランテーションを残しておいた。プランターが1840年代後半に賃金を減らそうとしたとき、ストライキが一時的に生産を止めた（Connolly 98-99）。

付け加えておくと、キューバは、1886年に奴隷制を廃止した。ブラジルは、アフリカ人やその子孫を奴隷にしていた西半球の最後の国であったが、1888年に奴隷制を廃止した。ブラジル人たちは、1831年に法律上廃止した後も、大西洋を横断する奴隷貿易に参加していた。1900年に最初の全アフリカ会議がロンドンのウェストミンスター・タウン・ホール（the Westminster Town Hall）でトリニダード人ヘンリー・シルヴェスター・ウィリアムズ（Henry Sylvester Williams）のリーダーシップの元で行われた。主な目標は、アフリカ人の子孫がイギリスの植民地で経験した不平等や差別に抗議することであった。結果として、カリブ人、アフリカ系アメリカ人、アフリカ人、白人のイギリス人が植民地支配的な人種差別政策に反対した。しかしながら、全ての参加者がアフリカにおけるヨーロッパの帝国主義の即時の廃止を求めたわけではない。会議は、アフリカ人を徐々に自由にするという方針をとり、ヨーロッパ列強に教育や社会的なプログラムを通してアフリカの植民地が長い年月をかけて独立国家になる手助けをすることを求め、黒人やアフリカ人に彼らが自由や平等を獲得するに値することを証明することを求めた（Jones 355-56）。

アフリカへの宣教に関しては、1890年代の人種隔離政策の始まりの時期に南アフリカで機能していた組織として重要なのがアフリカ・メソヂスト監督教会である。エリザベス・エンゲル（Elisabeth Engel）は、1890年代から1930年代までの写真を見て、文明化されたヨーロッパとは異なるアフリカを印象づけるような写真やヴィクトリア朝時代の探検家デイヴィッド・リビングストン（David Livingston, 1813-73）の勇敢さや忍耐強さと結びつけられる力強いキリスト教のフロンティア精神を彷彿とさせる写真があることを指摘している（Engel 404）。

11) クウィルプが家を留守にする前、トム・スコット（Tom Scott）に言う



「自分の帰りを待て、そのあいだ、逆立ち、とんぼがえり、いや、手ではい  
まわることも一切禁止、それを犯せばジリジリ責めの拷問を味わってもらう  
ことになるぞ」(373)という言葉は、彼が奴隷に対する主人であるかのよう  
な印象を与える。このことは、西インド諸島における奴隷の存在を思い起こ  
させる。17世紀後半から18世紀後半にかけて、西インド諸島は三角貿易の重  
要拠点であり、多くの奴隷が用いられていた。しかし、19世紀になって状況  
は、変わっていった。例えば、ハイチ (Haiti) の例がある。1822年にハイ  
チの大統領であるジャン・ピエール・ボワイエ (Jean-Pierre Boyer, 1776-  
1850) は、ドミニカ共和国の領土の全てはハイチの一部であると宣言し、  
奴隷制を終わらせ、ドミニカ共和国のスペインからの独立を確固たるものと  
した (Eller 654)。ハイチは、1793年の奴隷制廃止と1804年の独立の後、批  
判にさらされ、隣国ドミニカ共和国から蔑視されたりしていたが、統合によ  
り、解放や反奴隷制への熱がドミニカ共和国の領土にも入っていった (Eller  
662)。ドミニカ共和国の首都サント・ドミンゴ (Santo Domingo) は、長く  
プランテーションを支持した場所であった。西部では、牛を育てることによ  
って人々は生計を立てていた。ドミニカ共和国のエリートたちは、1700年代の  
奴隷制復活への希望を持つようになったが、ハイチ革命 (1791-1804) によ  
って妨げられ、反奴隷制、反スペインという雰囲気がドミニカ共和国の首都に  
蔓延した (Eller 663)。

12) Thomas Carlyle, *Sartor Resartus* (Oxford: Oxford UP, 1987), p. 77.

### Works Cited

- Bunyan, John. *The Pilgrim's Progress*. Oxford: Oxford UP, 1991.  
Carlyle, Thomas. *Sartor Resartus*. Oxford: Oxford UP, 1987.  
Cleere, Eileen. "“Implicit Faith in the Deception”: Misanthropy, Natural History  
and *The Old Curiosity Shop*.” *Dickens Studies Annual*. Vol. 35. Ed. Stanley  
Friedman, Edward Guiliano, Anne Humpherys, Michael Timko. New York: AMS  
P, 2005. 45-62.  
Coleman, Rosemary. “Nell and Sophronia—Catherine, Mary, and Georgiana:  
Solving the Female Puzzle and the Gender Conundrum in *The Old Curiosity  
Shop*.” *Dickens Studies Annual*. Vol. 36. Ed. Stanley Friedman, Edward Guiliano,

- Anne Humpherys, Michael Timko. New York: AMS P, 2005. 33-55.
- Connolly, Jonathan. "Indentured Labour Migration and the Meaning of Emancipation: Free Trade, Race, and Labour in British Public Debate, 1838-1860." *Past and Present*. No. 238. Ed. Alexandra Welsham, Matthew Hilton. Oxford: Oxford UP, 2018. 85-119.
- Dickens, Charles. *David Copperfield*. New York: Oxford UP, 1989.
- . *The Old Curiosity Shop*. New York: Oxford UP, 1991.
- . *Great Expectations*. New York: Oxford UP, 1992.
- Eller, Anne. "Rumors of Slavery: Defending Emancipation in a Hostile Caribbean." *The American Historical Review*. Vol. 122. No. 3. Ed. Jane Lyle. Oxford: Oxford UP, 2017.
- Engel, Elisabeth. "Southern Looks? A History of African American Missionary Photography of Africa, 1890s-1930s." *Journal of American Studies*. Vol. 52. Issue 2. Ed. Celeste-Marie Bernier, Bevan Sewell. Cambridge: Cambridge UP, 2018. 390-417.
- Fielding, Henry. *Tom Jones*. Harmondsworth: Penguin Books, 1966. 653-679.
- Gold, Joseph. *Charles Dickens: Radical Moralists*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1972.
- Huxley, Aldous. "Vulgarity in Literature." *Music at Night and Other Essays including "Vulgarity in Literature"*. London: Chatto & Windus, 1959: 270-336.
- Jackson, Lisa Hartsell, "Little Nell's Nightmare: Sexual Awakening and Insomnia in Dickens's *The Old Curiosity Shop*." *Dickens Studies Annual*. Vol. 39. Ed. Stanley Friedman, Edward Guiliano, Anne Humpherys, Talia Schaffer, Michael Timko. New York: AMS P, 2008. 43-58.
- James, Elizabeth. *Charles Dickens*. New York: Oxford UP, 2004.
- Jones, Jeannette Eileen. "'The Negro's Peculiar Work': Jim Crow and Black Discourses on US Empire, Race, and the African Question, 1877-1900." *Journal of American Studies*. Vol. 52. Issue 2. Ed. Celeste-Marie Bernier, Bevan Sewell. Cambridge: Cambridge UP, 2018. 330-57.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. Vol. 1. Tronto: Little, Brown and Company, 1952.

- Mah, Ann. “Shaping a Founding Father.” *The New York Times*. (May 17) New York: The New York Times, 2017.
- McCahill, M. W. *The Correspondence of Stephen Fuller, 1788–1795: Jamaica, the West India Interest at Westminster and the Campaign to Preserve the Slave Trade*. Chichester: The Parliamentary History Yearbook Trust, 2014.
- McAleavy, Maria. “The Discipline of Tears in *The Old Curiosity Shop*.” *Dickens Studies Annual*. Vol. 42. Ed. Stanley Friedman, Edward Guiliano, Anne Humpherys, Natalie McKnight, Michael Timko. New York: AMS P, 2011. 123–141.
- Murray, Britain. *Charles Dickens*. New York: The Continuum Publishing Company, 1994.
- Pollack, Pam. Belviso, Meg. *Who Was Alexander Hamilton?* New York: Penguin, 2017.
- Rubin, Alissa J. “Slave-trading past no longer in the shadows.” *The New York Times* (October 31). New York: The New York Times, 2018. 3.
- Schlicke, Paul. *Dickens and Popular Entertainment*. London: Allen & Unwin, 1985.
- Sater, Michael. *Charles Dickens*. Oxford: Oxford UP, 2007.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Penguin Books, 1972.
- ウートラム, ドリンダ, 『啓蒙』, 田中秀夫 (監訳), 逸見修二, 吉岡亮 (訳), 法政大学出版局, 2017.
- カーリン, ジョセフ・M, 『カクテルの歴史』, 甲斐理恵子 (訳), 原書房, 2017.
- ゾンバルト, ヴェルナー, 『ユダヤ人と経済生活』, 金森誠也 (訳), 講談社, 2015.
- フェロー, マルル, 『植民地化の歴史 征服から独立まで—十三～二〇世紀』, 片桐佑, 佐野栄一 (訳), 新評論, 2017.
- エリアーデ, ミルチャ, 『イメーじとシンボル』, 前田耕作 (訳), せりか書房, 1974.

## The Holiness and the Vulgarly in *The Old Curiosity Shop*

YOSHIDA Kazuho

*The Old Curiosity Shop* (1841) has been rated as both the best and the worst of Dickens's novels, but no matter the verdict the novel almost always receives critical consideration. It has provoked strong reactions from its first appearance to the present. The idea for the story came to Dickens when he was visiting Walter Savage Landor in March 1840, and the old poet became one of young Nell's greatest admirers, suggesting that the "divine Nelly" was the best creation since Shakespeare's Cordelia. The story had its detractors as well; Edward Fitzgerald condemned "Boz's sham pathos," and the Irish politician Daniel O'Connell threw the book out of the train window in indignation when he realized Nell was going to die. Most of Dickens's contemporaries, whether sophisticated readers or part of his broad popular audience, were deeply moved by the book. American readers are said to have gathered on the pier in New York as the ship arrived with the next serial installment to ask, "Is Little Nell dead?"

Many later critics have been less kind: it has been not well-received by them. Oscar Wilde is said to have quipped, "One must have a heart of stone to read the death of Little Nell without laughing," and Aldous Huxley chose Little Nell as a prime example of "vulgarity in literature"; her suffering, he claimed, lacked a context to give it significance. As a result it became merely bathetic sentimentality. Although many contemporary critics continue to condemn the novel as overwritten and sentimental, others find significant allegory and a probing critique of Victorian culture in Nell's story. At the beginning of the nineteenth century, cruel industrial managers worked women

and children very hard. Nell's escape reflects the condition that such a rough treatment was done under an unspoken agreement.

The purpose of this paper is to show the symbolic meaning of the death of Little Nell in *The Old Curiosity Shop* by considering the novel from the viewpoint of the pilgrimage of the old man and the child. Nell leaves the house of London with her grandfather to escape from the menace of the grotesqueness of Quilp, a moneylender, but she cannot be released from her difficulties; the old man cannot overcome the temptation to gamble without the help of Nell and she has to go through Birmingham as an industrial city. Nell as a victim of the old man overlaps with the image of Victorian children as victims of adult, especially those who worked in mines and factories. Dickens not only created 'the image of the child coming home to heaven' by using a bird as a metaphor of celestial soul and emphasizing the death of Nell in the Victorian age, but also showed the importance of reliance on God.